群教セ	G05 - 05
	平16.221集

音楽に対する感性が高まる指導の工夫
── 多様な楽曲を横断的に鑑賞し、考える活動を取り入れて ──

特別研修員　　山木　節子　（県立太田工業高等学校）

《研究の概要》

本研究は、多様な音楽を横断的に鑑賞しそれぞれの特徴を見出していく過程で、自ら新しい発見をしながら、音楽や音そのものに対する感性が高まるための指導を工夫したものである。多くの楽曲について考えたり表現したりすることを学習活動の中心とし、さらに各自の考えを出し合い、話し合う活動を通して、それぞれの感じ方の違いや表現方法の違いを知ることが、感性が高まるためにより有効に作用していくことを明らかにした。

【キーワード：音楽－高　感性　楽曲　音　鑑賞　考える活動】

Ⅰ　主題設定の理由

現代の高校生はテレビ、CD、インターネットなど、音楽にふれるための媒体をよく活用している。最近はメディアが集中的に放送するようなポップスよりも、あまり多くの人には知られていないが一部の人たちに強く支持されているようなジャンルの音楽に惹(ひ)かれる生徒も多い。彼らにとっては、自分たちだけが知っている特別な曲として、ひとつのステータスシンボルとなっているようである。授業中に、生徒がどのような音楽を好んでいるかを尋ねると、実に様々なジャンルが出てくる。また最近は、ドラムスやギターなどの教室の数も増え、専門家の指導を受けながらバンド活動をしている生徒もおり、学校外における音楽活動がいっそう盛んに行われていることがうかがえる。

その一方で、生徒の音楽環境が本当に充実しているかという疑問を感じるときがある。例えば、生徒がメディアを中心に音楽にふれているということは、情報発信者の意図を少なからず受けているということになる。音楽教室では楽器の奏法は教えてもらえるが、演奏するのはその楽器のための楽曲だけにとどまってしまうだろう。だからこそ高校の音楽の授業では、音楽の幅広い活動を、より重要な内容として扱わなければならないのではないか。つまりは幅広いジャンルの音楽を鑑賞し、それぞれの成り立ちや社会的背景についてだけでなく、生徒自身の感じ方を大切にしながら、幅広く深く考えていくことが必要なのではないかと考えた。ここでの「幅広く」とは、主体的にかかわっていく音楽の選択肢としての幅であり「深く」とは知識ではなく、各楽曲へのアプローチの仕方であるととらえたい。これらの活動が音楽にかかわっていくための土台ばかりでなく、音楽に対する感性を高めていくきっかけになるだろうと考えている。より多くの音楽から新しい発見をし、それぞれの共通点や特徴を見出していく過程で、音楽や音そのものに対する感性を高めていってほしいと思う。

音楽には様々なとらえ方がある。芸術作品として、趣味の対象として、医療や福祉・宣伝の道具として。さらに音が発せられる環境や聴く人の心境によって、楽曲そのものが騒音ととらえられてしまったり、逆に、例えば街のざわめきや水滴の落ちる音のように、創意無くして発せられた音が、まるで音楽のように感じられたりすることもある。「そもそも音楽とは何なのだろう。音楽を音楽たらしめるものがあるのだろうか。」と生徒に多くの疑問を投げかけ、今までの音楽に対する考え方に一石を投じたい。生徒によっては、今まで音楽に対する考え方そのものももっていなかったかもしれない。だとしたらなおのこと、音楽について考える活動を

経験させ、彼らが自分にとっての音楽の新たな一面を発見するきっかけとしたい。

II　研究のねらい

多様な楽曲を横断的に鑑賞し、これらの楽曲について考えたり表現したりする活動を取り入れることが、音楽に対する感性が高まるために、より有効に作用していくことを明らかにする。

III　研究の見通し

1　多様な楽曲を鑑賞し、それぞれの特徴や共通点を考え話し合うことによって、それらの表現方法や印象が、人それぞれに違うということに気付くであろう。

2　多様な表現方法の音楽を演奏体験したり、考えたりすることによって、作曲者や演奏者にも様々な発想があることを感じ取ることができ、音楽のとらえ方が広がるだろう。

3　培った感性を踏まえ、身の回りの音や音楽について考えることによって、音環境を身近な問題として意識することができるようになり、音楽に対する感性が高まるであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　「音楽に対する感性が高まる」とは

「感性」について、学習指導要領解説には「外界の様々な刺激に対して、よいもの、美しいもの、豊かなものなどの価値を感じる心の働き」と記述されている。感性が高まった結果としては様々な状態が考えられるが、本研究では、高等学校における音楽として、感性を「豊かな感受性に支えられた判断力を身につけること」にまで発展させたい。ここにおける判断力とは、自分が感じたことを大切にしつつ、違った感じ方も受け入れられ、またそうした中から新しいことを発見できる力である。

(2)　「多様な楽曲を横断的に鑑賞する」とは

多様な楽曲とは、時代的・民族的・作曲演奏法的に様々な楽曲である。考えられる限り多様な音楽の中から、意図的に数曲を選択し鑑賞させたい。

優れた音楽表現のためにはある一定の技術が必要であるように、音楽をじっくりと鑑賞するためには、初めて接するスタイルの音楽を感覚的に分析する力をもってほしいと思う。本研究では、ある一つの楽曲の形式、演奏形態、作曲者、時代・社会背景などを知識として学習するのではなく、複数の楽曲を鑑賞し生徒の感覚でもって比較分析することによって、それぞれの特徴や共通点などを発見したり理解していく方法をとる。

(3)　「考える活動」とは

問題の答えが決まっているわけではない。感じ方や考え方は人によって違い、その違いを受け入れる方法も人それぞれである。音楽か、そうでないかの判断は、その音を聴いた者に委ねられている。この考えもとらえ方のひとつにすぎない。ここでの「活動」とは、結論を出すために考える活動ではなく、様々な考えを出し合うことによって、互いのとらえ方の違いや、音楽に対する新しい考え方に自ら気付いていく活動である。気付くことによって得られる「ひらめき」や「感動」は、音楽に対する感性を高めるとともに、音楽に主体的にかかわっていこう

という意識を培うことにつながっていくはずである。
また「話合い」や「演奏」は、考えを深めるための手段としてとらえている。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような方法で授業実践を行い、検証する。

(1)　授業実践計画

対象	県立太田工業高等学校１学年	期間	平成16年10月下旬～上旬
題材名	音楽？音楽！（４時間計画）	授業者	山木　節子
抽出生徒	A：とても真面目であるが、音楽の授業において、自分を積極的にアピールすることは少ない。 考える活動を通して、生徒自身が感じていることをみとめていきたい。		
	B：音楽は不得意ではないが、授業に対して消極的な傾向がみられる。 考える活動や友達との意見を交換を通して、音楽に対する自分なりの感想をもってほしい。		

(2)　検証計画

項目	検　証　の　観　点	検証の方法
見通し１	多様な楽曲を鑑賞し、それぞれの特徴や共通点を話し合うことは、音楽の表現方法や鑑賞者がもつ印象が、人それぞれに多様であることに気付くために有効であったか。	観察（発言・取組） 学習カードの記述
見通し２	現代音楽を演奏体験することによって、作曲法上の斬新さや多様な表現手段を知ることは、音楽の新たなおもしろさを発見するために有効であったか。	観察（発言・取組）
見通し３	培った感性を踏まえ、身の回りの音や音楽について考えることは、とらえ方の個人差に気付いたり、音環境を身近な問題としてとらえることができるようになったり、音楽に対する感性が高まるために有効であったか。	観察（発言・取組） 学習カードの記述

Ⅴ　研究の展開

1　題材名　音楽？音楽！

教材　・様々な表現方法による楽曲

さまざまな表現方法	鑑賞する楽曲
音楽の３要素の考え方にこだわらない表現	「Clapping Music」（S.ライヒ） 「４分33秒」（J.ケージ）
従来の演奏法にこだわらない表現	「オートバイ」（ヴィレ）
オリジナルと趣の異なるアレンジ表現	「少年時代」（Jazz） 「ルパンⅢ世のテーマ」（弦楽四重奏）
宗教音楽	「主をたたえよ」（グレゴリオ聖歌）
民族音楽	「ムックリ・ハウエヘ」（北海道の口琴）

・ドキュメンタリー番組ビデオ　　「文化騒音」（東京ワイド）

2　題材の考察

鑑賞のための楽曲は、様々な角度（形式的、歴史的、発想的等）から、大変特徴のある楽曲を選んだ。宗教音楽や現代音楽など、生徒が鑑賞して、自ら特徴を発見しやすいという点にも気を配った。

聴く側の経験の度合いや考え方にもよるが、一般的に、前衛的な音楽について「このような音は、音楽とは認めたくない」と拒否反応を示す者は多い。この学習活動の中で「近年、音楽に対する価値観が広がっているので、すべてを音楽だと認めるべきだ」と指導するつもりはない。ただ多くの楽曲を鑑賞し、様々な意見を交換・発表することによって、人によって音楽のとらえ方は違うけれど､感じたことはそれぞれがすべて正しいのだという点に気付いてほしい。私自身この「気付き」はとても大きな意味をもつものだと考えている。これらの「気付き」が、互いの趣味嗜好（しこう）を尊重し合うことに発展していくのはもちろんのこと、「こんな音も『音楽』として考えている人がいるのだ」といった発見は、これから多くの音楽に自らふれていこうと

いう気持ちが高まるための一助になると思う。

3　目標及び評価規準

目標	・様々な楽曲の鑑賞・演奏を通して、人によって、音楽表現やその感じ方が様々であることを知る。 ・身の回りの音や音楽について検証し、音環境を身近な問題としてとらえることができるようになる。			
評価規準	ア　<関心・意欲・態度>	イ　<芸術的な感受や表現の工夫>	ウ<創造的な表現の技能>	エ<鑑賞の能力>
題材の評価規準	・鑑賞や演奏に積極的に参加し、自分の考えをまとめようとしている。	・それぞれの楽曲の特徴や、音環境の問題に気付くことができる。	・楽曲の特徴を引き出すような演奏をすることができる。	・それぞれの楽曲の特徴を味わって聴くことができる。
学習活動における具体的な評価規準	①自分の好み以前に、まずは認めようという態度で鑑賞し、積極的に意見を交換している。 ②演奏活動に積極的に参加している。	①それぞれの楽曲の演奏方法や聞こえる音色、音の発せられ方などの特徴に気付くことができる。 ②自分が感じたことや友達の意見から、身近な問題として音環境をとらえることができる。	①お互いの音を聴きながら演奏することができる。	①それぞれの楽曲の特徴に気付き、それらを味わって聴くことができる。

4　指導と評価の計画（全4時間予定）

段階 見通し	時間	学習内容　及び　学習活動	支援　及び　指導上の留意点	評価の観点及び評価方法
気付く 見通し1	第1時	・教材を鑑賞し、感想をカードにまとめる。 ・互いに感想を述べ、その傾向や違いに気付く。	・生徒それぞれが自由に感じられるよう、楽曲紹介は曲名・作曲者または地域・編成にとどめる。 ・話合いの進行は、授業担当者が行うが、できるだけ多くの生徒に発言させるとともに、すべての意見を尊重するような板書に気を配る。	ア①・エ① 観察 学習カード
体験する 見通し2	第2時	・「Clapping Music」をグループで演奏し、現代音楽の一つの形式として体験する。 ・楽曲の構成について知る。	・演奏を完成させるのではなく、楽曲を体験することにとどめる。 ・作曲法上の特徴に自ら気付くため、質問の仕方を工夫するとともに、板書を明確にし、練習の効率　化をはかる。	ア②・ウ① 観察
	第3時	・「４分33秒」の間に聞こえてきた音を書き留め、現代音楽の発想の一つを知る。さらに結果について話し合う。	・故意に音を発することはしない。 ・聞こえてきた音を、一つずつ板書し、その対象や量の違いに、生徒が気づいていけるよう、具体的に発問する。 ・同じ環境でも、集中力や指向性によって聞こえ方が違うことに気付かせる。	イ① 観察 学習カード
高まる 見通し3	第4時	・ビデオを参考に、自分たちの日常生活をふり返り、身の回りの音環境について考える。 ・これまでの感想をまとめる。	・生徒が、芸術作品として以外の音楽の様々な側面に気付き、考えが深められるよう、身近な問題から掘り下げていく。 ・生徒自身の感想が、文章を書くことによって妨げられないよう、箇条書きでもよいとする。	イ② 観察 学習カード

Ⅵ　研究の結果と考察

1　多様な楽曲を鑑賞し、それぞれの特徴や共通点を話し合うことは、音楽の表現方法や鑑賞者がもつ印象が、人それぞれに多様であることに気付くために有効であったか

クラスでの話合い初期の段階では、「特徴ってどういうの？」「分からない」など、何を話し合っていいのかピンとこない場面も多かった。しかし「音が響いてる」「歌詞がなかった」「ビョンビョンいってた」など、気付いたことを何でも発表していいのだという場に慣れると「スゴイね！」「ナニこれ!!」といった驚きや、「この楽器やってみたい」といった共感などの発言がたくさん出るようになった。生徒の中には「好きになれない」「音楽じゃないと思う」という意見もあったが、人それぞれに多様であることの実際であり、自分の意見として堂々と言える態度を評価したい。Aが友達の発表に耳を傾け、何度も深くうなずいていたのが印象的である。Bが自分から積極的に発言することはなかったが、指名されると「『少年時代』はな

んだかJazzの感じ」など、鋭い発言をした。

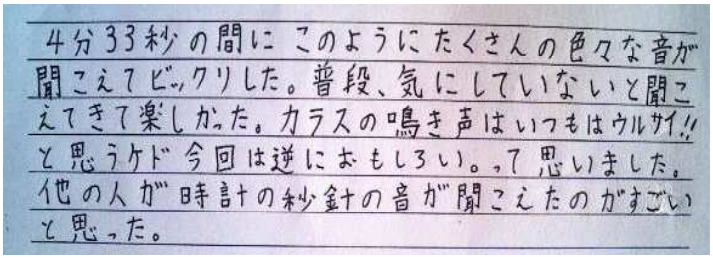
クラス全体で話し合うことにより、友達の意見に触発されて発想が柔軟になったり、友達の意見に共感できたりするなどという効果も得られた。そのためには、生徒が自由に発表できる雰囲気をつくることが、とても重要である。

2　現代音楽を演奏体験することは、作曲法上の斬新さを知り、音楽の新たなおもしろさを発見するために有効であったか

「Clapping Music」について話し合う活動では、自分たちの発想だけで「第２パートは、最小フレーズを半拍ずつずらしていくだけで成立している」という点に気付くことができた。演奏体験も好評で、休み時間になっても２人組になって合わせてみたり、次の時間に「練習してきたよ」と、皆の前で演奏した生徒もいた。①手を叩くだけで演奏できる、②リズム用の一線譜なので読譜が容易である、③２パートのアンサンブルが成功するかどうかがゲームのように感じられる、といった楽曲の特徴がよくはたらいたようである。

「４分33秒」の解説をしたところ、「あり得ない!!」「そんなのアリ？」という声があがったが、実際に聴きとる体験をし発表し合ったことで、多くの発見があったようだ。「多人数、少人数でやってもおもしろいと思う」「それぞれの人、場所によって聞こえる音が違うので、そういう所もこの曲のいい所なのかなと思った」といった意見が出された。Aは学習カードに「静かにしていても意外といろいろと聞こえてきて、とてもおもしろいと思いました。意識するといろいろと聞こえてくる」と書いていた。Bは「聞く度に違う演奏になるのが特徴だと思う」と発言し、自分の意識の違いからでも聞こえ方が違ってくることに、おもしろさを感じたようである（資料１）。

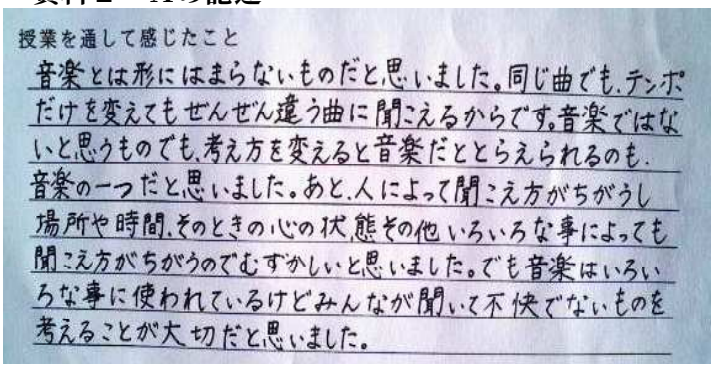
資料１　Bの記述


4分33秒の間にこのようにたくさんの色々な音が聞こえてビックリした。普段、気にしていないと聞こえてきて楽しかった。カラスの鳴き声はいつもはウルサイ!!と思うケド今回は逆におもしろい。って思いました。他の人が時計の秒針の音が聞こえたのがすごいと思った。

現代音楽は今までの表現方法にとらわれない、斬新な方法をとっていることが多い。このことが生徒の読譜や演奏技術に対する苦手意識を払拭（ふっしょく）するとともに、「こんなのもアリなんだ」という気持ちを起こさせた。「救急車のサイレンも音楽だね」「チャイムは？」など多くの発言があり、生徒の音楽のとらえ方の広がりがうかがえた。

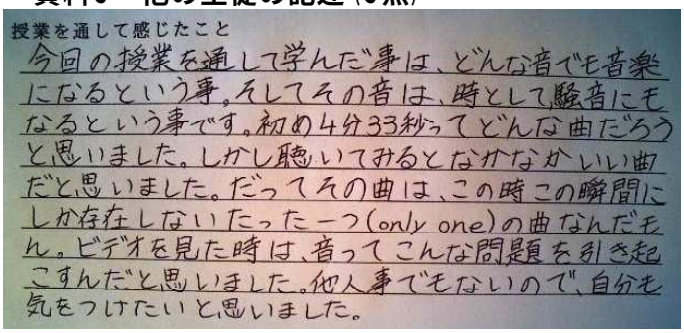
3　身の回りの音や音楽について考えることは、とらえ方の個人差に気付いたり、音環境を身近な問題としてとらえることができるようになったり、音楽に対する感性が高まるために有効であったか

資料２　Aの記述

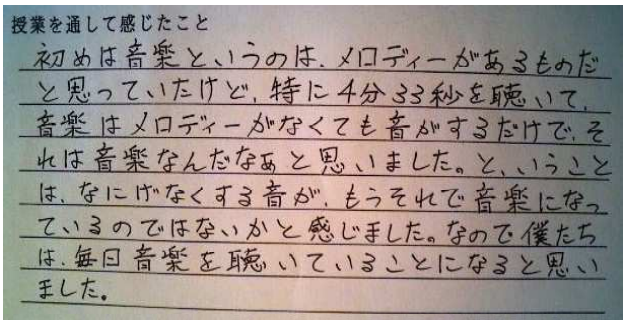

授業を通して感じたこと
音楽とは形にはまらないものだと思いました。同じ曲でも、テンポだけを変えてもぜんぜん違う曲に聞こえるからです。音楽ではないと思うものでも、考え方を変えると音楽だととらえられるのも、音楽の一つだと思いました。あと、人によって聞こえ方がちがうし場所や時間、そのときの心の状態その他いろいろな事によっても聞こえ方がちがうのでむずかしいと思いました。でも音楽はいろいろな事に使われているけどみんなが聞いて不快でないものを考えることが大切だと思いました。

ビデオを参考にすることで、電話の着信音やCMソング、地域の公共放送など、鑑賞して楽しむため以外の音楽に目をむけることができた。「朝の音楽は、自分が起きるのに役に立ってるけど、夕方のはいらない」「（町の放送で）時報はいいけど、お知らせを言うのは邪魔」など、ビデオ

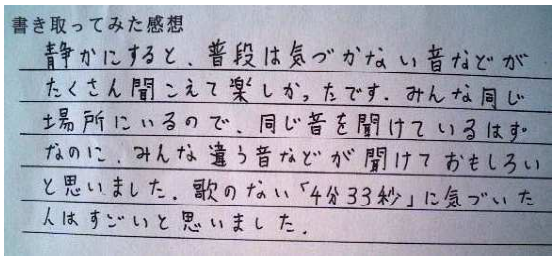
資料３　他の生徒の記述（３点）


授業を通して感じたこと

今回の授業を通して学んだ事は、どんな音でも音楽になるという事。そしてその音は、時として騒音にもなるという事です。初め4分33秒ってどんな曲だろうと思いました。しかし聴いてみるとなかなかいい曲だと思いました。だってその曲は、この時この瞬間にしかなにしないたった一つ(only one)の曲なんだもん。ビデオを見た時は、音ってこんな問題を引き起こすんだと思いました。他人事でもないので、自分も気をつけたいと思いました。


授業を通して感じたこと

初めは音楽というのは、メロディーがあるものだと思っていたけど、特に4分33秒を聴いて、音楽はメロディーがなくても音がするだけで、それは音楽なんだなあと思いました。と、いうことは、なにげなくする音が、もうそれで音楽になっているのではないかと感じました。なので僕たちは、毎日音楽を聴いていることになると思いました。


書き取ってみた感想

静かにすると、普段は気づかない音などがたくさん聞こえて楽しかったです。みんな同じ場所にいるので、同じ音を聞けているはずなのに、みんな違う音などが聞けておもしろいと思いました。歌のない「4分33秒」に気づいた人はすごいと思いました。

の内容と自分の生活を重ね合わせながら、活発な討論をすることができた。Ａは音楽の在り方について深く考えることができたようである（資料２）。Ｂは「音のことについていろいろな面からみたことによって少しは音を気にするようになった。今まで店の中などでいろいろな音を聞いてきて、何回かうるさいと思ったけど、その理由も分かってよかった」と書いていた。

さらに見通し１、２での学習活動の経験が大きくはたらいたようである（資料３）。話合いの場で友達の意見から自分の考えが深まったりする場面を多く観察することができた。また自分の実体験と結びつけて考える生も多くみられるなど、これらの手だてが、音楽の感性が高まるために有効であることが分かった。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　大半の場面で見通しどおりの結果が得られたと思う。予想以上に高校生の感じ方は柔軟で、一般に難解といわれる現代音楽もすんなり鑑賞し、自分の生活と結びつけて考えられる生徒が多かった。また話し合う（考える）活動は、互いの感じ方を刺激し合い、深め合うきっかけとなった。個人の小さな気付きが、話し合いによって大きな発見になることを、生徒自身も実感できたことと思う。Ａが音楽について深く考えカードに記述していたり、Ｂがとても豊かな感受性をもっていることが伝わってきたり、多くの生徒が、歌唱や器楽の学習ではみられない一面を見せてくれた。

○　生徒の記述の中には「騒音だと感じる人は気にしすぎていると思う」「４分33秒はバカみたいな曲」というものもあった。もちろん、これらの意見も感じ方の一つとして否定はしないが、こうした生徒の記述だけで、真剣に聴き考えた結果なのか、授業を積極的に受けなかった結果なのか、それらを見極めていくことは難しい。だからこそ、観察法での評価や日頃の対話など、多角的な評価方法が重要なのである。生徒が興味をそそられるような曲の紹介や質問の方法、学習カードの書式について、さらに工夫していきたいと思う。

＜参考文献＞

・星野　圭朗　著　『創って表現する音楽学習～音の環境教育の視点から』　　音楽之友社（1995）